

【 復活のトロパリ 第2調 】

し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
 死 生 命 爾 死 降

と お き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
 時 神 性 光 地 獄

く を こ ろ せ え り 。 し せ し も の を ち か よ
 殺 死 者 地 下

り ふ く か つ せ し め し と お き 、 て ん ぐ ん み な
 復 活 時 天 軍 皆

よ び て い え り 、 い の ち を た も う し ゆ
 呼 日 生 命 賜 主

ハ リ ス ト ス わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
 吾 神 光 榮 爾

き い す 。
 歸

【 日本の使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ち ゆ う
 使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖

な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ 、 あしとしゆきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教聖

よ 、 なんぢのぼくぐんのため あめ 、 および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため 、 いのちをたもうせい
全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ 。
三者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ おとせいしんにき
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

せいせいしゃあしとせいニコライよ 、 わが
成 聖 者 亜使徒聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに 、 なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども 、 ハリストスの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし 、 なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬神子爲彼等神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵與教會建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今此教會爲祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給蓋我等其諸子爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼我善牧者慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今何時世世
 ぜんのおのきゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ
 全能救世主爾墓復
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活地獄奇蹟見
 おののき、ししゃはお起き、ぞうぶ
 慄死者起造物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見爾偕喜

と も に た の し い み 、 わ が き ゆ う せ い し ゆ
共 楽 我 救 世 主
よ 、 せ か い は つ ね に な ん ぢ を ほ め う と お
世 界 常 爾 讚 歌
お う。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 は 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、
いま いつ よよ
今も何時も世に、)

【 プロキメン 主日第2調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と お な あ れ り 。
救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と お な あ れ り 。
救

誦經) 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と お な あ れ り 。
彼 我 救

【 アポストロス 使徒經 141 端 コリント前書 9 章 2~12 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、爾等は主に於て我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

われらあにくらのけん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ
なり。我等豈 食い飲むに權なきか。我等豈 姉妹なる妻を 攜 うること、他の使徒及び主の
けいてい およ ごと しか けん そもそもひとりわれ こうさく けん
兄弟、及びキファの如く 然る權なきか。抑 獨 我とヴァルナヴァとは工 作せざる權な
だれ ぐんし な おのれ きゅうよう もつ つと だれ ぶどう う そのみ くら
きか。誰か軍士と爲りて、己の給 養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹えて、其果を食
だれ むれ ぼく むれ ちち くら われただひと じょう したが これ い
わざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食わざらん。我唯人の情に 循いて之を言うか。
りつぼう またか い あら けだし りつぼう する いわ こくもつ ふ おと うし
律法も亦斯く言うに非ずや。蓋 モイセイの律法に録して云く、穀物を踐み落す牛には
くち と なか かみ うし ため おもんばか そもそもこれ い こと われら ため
口を閉づる勿れと。神は牛の爲に 慮るか。抑 之を言うは、特に我等の爲にするか。
こ われら ため する けだしたがえ もの のぞみ たがえ こくもつ ふ おと もの
是れ我等の爲に録されたり、蓋 耕す者は、望ありて 耕すべし、穀物を踐み落す者
そのきぼう ところ う のぞみ これ な も われなんぢら うち しん ぞく もの ま
は、其希望する所を獲る 望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を播
なんぢら み ぞく もの か あにだいじ も たにんこ けん なんぢら うち
きたらば 爾等の身に屬する物を獲るは、豈 大事ならんや。若し他人此の權を 爾等の中に
え いわん われら しか われら こ けん もち すなわちおよそ こと しの
獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃 凡の事を忍ぶ、ハリ
ふくいん いささか さまたげ お ため
ストスの福音に 聊も阻礙を置かざらん爲なり。

(比較用 口語訳) あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があるか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があるか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があるか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなししている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言うておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにするされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

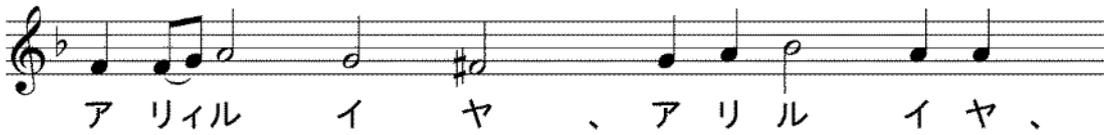
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾に平安、

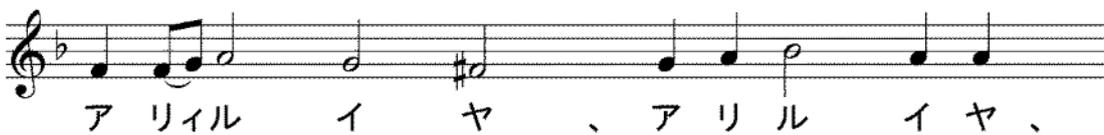
誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

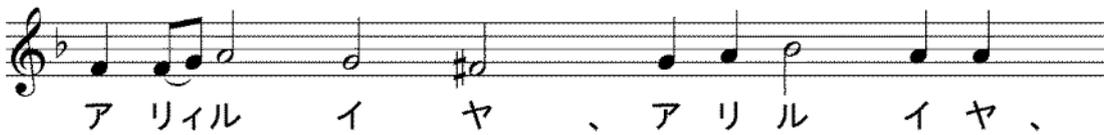
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが} 願わくは ^{しゅ} 主は ^{うれい} 憂 ^ひ の日に ^{おい} 於て ^{なんぢ} 爾 ^き に ^{かみ} 聴き、 ^な イアコフの ^{なんぢ} 神の名は ^{ふせ} 爾 ^{まも} を ^{まも} 扞ぎ衛らん、



誦經) ^{しゅ} 主よ、 ^{おう} 王を ^{すく} 救え、 ^{またわれら} 又我等が ^{なんぢ} 爾 ^よ に ^{とき} 呼ばん時、 ^{われら} 我等に ^き 聴き ^{たま} 給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと} 人を ^{あい} 愛する ^{しゅ} 主宰 ^い よ、 ^わ 我が ^{こころ} 心に ^{かみ} 神を知る ^し 智慧 ^{ちえ} の ^い 浄 ^い き ^よ 光 ^{ひかり} を ^{かがや} 輝 ^わ かし、 ^{しねん} 我が ^{しねん} 思念

^め の ^{ひら} 目を ^{なんぢ} 啓 ^{ふく} きて、 ^{いん} 爾 ^{おしえ} が ^{さと} 福音 ^{たま} の ^わ 教 ^{なんぢ} を ^{ふく} 悟 ^{いましめ} らしめ ^め 給え、 ^わ 我が ^{なんぢ} 衷 ^{ふく} に ^い 爾 ^い の ^い 福 ^い たる ^い 誠 ^い を

^{おそ} 畏 ^{おそれ} る ^い 畏 ^{われら} を ^{ことごと} も ^{にくたい} 入 ^{よく} れて、 ^ふ 我等 ^{およ} が ^{なんぢ} 悉 ^よ く ^{ところ} の ^{ところ} 肉 ^{ところ} 體 ^{ところ} の ^{ところ} 慾 ^{ところ} を ^{ところ} 踏 ^{ところ} み、 ^{ところ} 凡 ^{ところ} そ ^{ところ} 爾 ^{ところ} の ^{ところ} 喜 ^{ところ} ぶ ^{ところ} 所 ^{ところ}

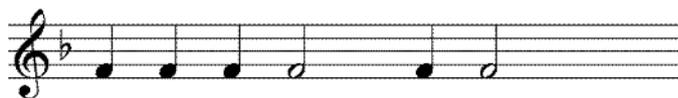
^{おも} を ^か 思 ^{おこな} い ^{ぞくしん} 且 ^{せい} つ ^{かつ} 行 ^す い ^{いた} て、 ^{たま} 屬 ^{けだし} 神 ^{かみ} の ^{かみ} 生 ^{かみ} 活 ^{かみ} を ^{かみ} 過 ^{かみ} ぐる ^{かみ} を ^{かみ} 致 ^{かみ} させ ^{かみ} 給 ^{かみ} え、 ^{かみ} 蓋 ^{かみ} ハ ^{かみ} リ ^{かみ} ス ^{かみ} ト ^{かみ} ス ^{かみ} 神 ^{かみ} よ、

^{なんぢ} 爾 ^わ は ^{たましい} 我が ^{からだ} 靈 ^{こうしょう} と ^{われらなんぢ} 體 ^{なんぢ} と ^{むげん} の ^{ちち} 光 ^{しせいしぜん} 照 ^{しせいしぜん} な ^{しせいしぜん} り、 ^{しせいしぜん} 我 ^{しせいしぜん} 等 ^{しせいしぜん} 爾 ^{しせいしぜん} と ^{しせいしぜん} 爾 ^{しせいしぜん} の ^{しせいしぜん} 無 ^{しせいしぜん} 原 ^{しせいしぜん} の ^{しせいしぜん} 父 ^{しせいしぜん} と ^{しせいしぜん} 至 ^{しせいしぜん} 聖 ^{しせいしぜん} 至 ^{しせいしぜん} 善 ^{しせいしぜん} に ^{しせいしぜん} し

^{いのち} て ^{ほど} 生命 ^{なんぢ} を ^{しん} 施 ^{こうえい} す ^{けん} 爾 ^{いま} の ^{いつ} 神 ^よ と ^よ に ^よ 光 ^よ 榮 ^よ を ^よ 獻 ^よ ず、 ^よ 今 ^よ も ^よ 何 ^よ 時 ^よ も ^よ 世 ^よ 世 ^よ に、 ^よ ア ^よ ミ ^よ ン。)

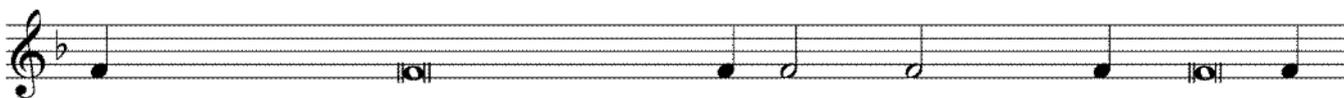
【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 ^{エヴァンゲリオン} マ ^{エヴァンゲリオン} ト ^{エヴァンゲリオン} フ ^{エヴァンゲリオン} ェ ^{エヴァンゲリオン} イ ^{エヴァンゲリオン} 福 ^{エヴァンゲリオン} 音 ^{エヴァンゲリオン} 書 ^{エヴァンゲリオン} 77 ^{エヴァンゲリオン} 端 ^{エヴァンゲリオン} 18 ^{エヴァンゲリオン} 章 ^{エヴァンゲリオン} 23 ^{エヴァンゲリオン} ~ ^{エヴァンゲリオン} 35 ^{エヴァンゲリオン} 節 ^{エヴァンゲリオン} 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、天國は、其諸僕と會計せんと欲せ

し君王に似たり。會計を始めし時、一千万金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其

償うこと能わざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、

償わんことを命ぜり。其僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我盡

く爾に償わん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、

一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾

が負う所を我に償え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我

尽く爾に償わん。然れども、彼肯わず、乃往きて、其債を償うに至るま

で、之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚憂い、來りて有りし所を悉く主に

告げたり。其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債

を悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非

ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾

等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に

おこな
行わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負

債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 き 歸 し、 光 榮

は なんぢに き す 。
爾 き 歸 す

※ 聖体礼儀③（金口イオアン）へ